

特集  
の  
視点

# FinTechの共創戦略が 金融サービスを変える

PROVISION 91号 コンテンツ・リーダー

日本アイ・ビー・エム株式会社  
グローバル・ビジネス・サービス事業  
アプリケーション開発・保守推進 アーキテクト統括担当  
IBM Distinguished Engineer (技術理事)

二上 哲也 Tetsuya Nikami



2007年、ほぼ同時期に世に放たれたiOSとAndroid。この2つのモバイルOSにより世の中は大きく変わりました。かつてのスーパー・コンピュータ並みの速度のCPUが手のひらに収まり、老若男女が電車などで常にインターネットにアクセスできる環境が実現されたのです。インターネットにアクセスするユーザーは劇的に広がり、インターネットを利用する時間も増大しました。その一方で、多くの金融機関は、若年層がなかなか支店を訪れず店舗や窓口が減っていく中で、顧客と接する時間が短くなることに苦慮していました。そういった金融機関が、モバイルを活用して変革を起こしたいと思うのは自然な流れでした。

2008年、サトシ・ナカモトを名乗る人物がビットコインに関する論文を公表しました。翌年からビットコインの運用が開始され、より複雑化する国際社会の中で、その仮想通貨の価値が上昇しています。ビットコインのベース・テクノロジーであるブロックチェーンは、仮想通貨以外にもさまざま

な資産のトレーサビリティやエビデンス確保といった用途において大きな注目を集めています。

2007年、IBMが本格的に研究を始めたのが、「IBM Watson」(以下、Watson)です。2011年に米国のクイズ番組で人間のチャンピオンを破ったことで一躍有名になりました。その後、さまざまなAI系のテクノロジーをビジネスに活用する流れが世界的に広がっています。

くしくも時期を同じくして登場した、モバイルとブロックチェーン、そしてWatson。クラウドのサービスも同じ時期に開始されており、ITの歴史における不連続(Disruptive)な転換期となっています。この時期は、2008年から2009年のリーマン・ショックなどによる世界的経済後退の直前でしたが、企業は2000年前後のITバブルの余韻でまだ少し余力がある状態でした。一般の企業は、SOAなどにより既存システムの整理や競争力強化に注力しており、まだ革新的な技術を採用し新しいサービスを提供する機運は大きくなかった時期

です。しかし、現在世の中を変えつつある多くの技術は、この時期に生まれ育まれてきたのです。

リーマン・ショックによる経済後退から5年後の2014年。復活した大手企業はいよいよ攻守を切り替え、新しいサービスの構築に乗り出しました。ただ、その空白の5年間で過ぎてみて遭遇したのは、最新技術を活用し規模を拡大したGAFA (Google、Apple、Facebook、Amazon) と呼ばれる新しいプラットフォーマーや、台頭してきたFinTech企業などのベンチャー企業でした。新旧交代か、組むのか戦うのか、そのような議論もされました。しかし、多くの企業が選んだのは共存によるビジネス拡大でした。

2014年のIBMとAppleの提携発表のころから、共存の流れは鮮明になっています。同じ年にIBMはワトソン事業部を設立し、ブロックチェーンの用途拡大を発表し、本格的なAPI管理製品をリリースしました。これらのテクノロジーを全企業が利用可能にすることで、新興企業だけでなく、従来の企業も最新テクノロジーを活用した新しいプラットフォームを構築することが可能になったのです。

金融機関はこのころから、こういった最新テクノロジーを活用し、新しいサービスを提供する攻勢に転じました。まさにこれが、金融 (Finance) と最新のテクノロジー (Technology) を融合させた、FinTechです。モバイルから銀行の口座にアクセスできるモバイル・バンキングを構築したり、Watsonで問い合わせに対して応答したり、ブロックチェーンを活用して仮想通貨に参入

したり、ベンチャーのFinTech企業と既存の銀行システムをAPIで接続したりするなど、既にさまざまな最新テクノロジーが金融ビジネスで使われ始めています。そしてそれらの多くは、従来と異なるユーザー体験を提供し、接点の薄れていた顧客層を取り込みつつあります。こういったユーザーとの接点を強化するシステム——それこそが、「Systems of Engagement:協働のためのシステム」です。

こうした新しいテクノロジーを活用したシステムは、単一の企業やチームだけで使っていても効果が薄いことが特徴です。これらの技術は新しいプラットフォームを創り出すためのものであり、プラットフォームは限られた範囲だけで利用していても効果が見えにくいためです。例えばブロックチェーンは、複数の企業で分散台帳を持って情報を共有することでその効果が大きくなります。Watsonも賢い知識を身に付けるにはより広い観点での知識や情報が必要になります。新しいサービスを提供するFinTech企業やモバイル・アプリと既存の金融システムとをAPIを活用してつなぐことで、より迅速に新しいサービスを提供することが可能になります。FinTechで成功するには、新しいテクノロジーを活用して新しいプラットフォームを創造することと、企業やチームを超えた新しいビジネスのための戦略——つまり、「共創」が鍵になると考えています。

2007年から10年後の今年、2017年。FinTechによる共創戦略で、金融サービスが大きく変わろうとしています。